

隈崎さん マーケットが乱立しているからこそ、特定のテーマに絞ることが付加価値に繋がると思っています。10月に行われた「おいもフェス」のや」では、さつまいもにコンセプトを絞ることで、生産者や食品加工者、飲食店などが連携し、さつまいもの新たな料理や商品開発にも結びつきました。また、こうした取り組みをお肉やお魚にも広げていくことで、新たな商品開発に繋がっていくと思います。

市長 お土産ボックスは非常に良いアイデアだと思います。例えば、キタダサルツガにお土産ボックスのようなセレクト商品を置くなど、鹿屋のお土産づくりにもう少しうまく活用してほしいと思ってます。また、鹿屋の包装紙を作つて、ふるさと納税の返礼品なども統一すれば、ブランディングに繋がっていくかもしれませんね。

隈崎さん ブランディングとして、お土産ボックスで使用する箱や包装紙を統一することで、鹿屋を知つてもらうきっかけ作りになると思います。

市長 どこで買えるかを記載してはどうでしょう。

和田さん 以前、鹿屋市が豚ばら丼を提供する飲食店を募集し、市内の多くの店で豚ばら丼を食べることができました。こうした取り



組みもコンセプトを絞ることで、生産者や食品加工者、飲食店などが連携し、さつまいもの新たな料理や商品開発にも結びつきました。また、こうした取り組みをお肉やお魚にも広げていくことで、新たな商品開発に繋がっていくと思います。

市長 鹿屋は生産者との距離が近いので、漁業であれば餌やり体験を行った後に、漁師めしを振る舞うなどの体験を行うことができると思いますが、そういったことを仕掛ける人が必要かと思います。

組みは、市外から人が来た時も「どこに行つても食べられるよ」と言えたので、とても良かったと思います。



新美さん 子どもが幼稚園で田植えから脱穀まで体験させていただきたいするなど、食に関する体験を日常的にしています。また、都会の友人から「農業や漁業の体験をさせたい」という相談をよく受けますが、一消費者にはその繋ぎ役になることが難しいのが現状で

市長 鹿屋は生産者との距離が近いので、漁業であれば餌やり体験を行つた後に、漁師めしを振る舞うなどの体験を行つていただける人が必要かと思います。仕掛ける人が必要かと思います。



新美さん 私が移住してきて一番心を動かされたのは、鹿屋の「人の温かさ」です。この温かな繋がりがある鹿屋なら、生産者も消費者も、その枠組みを越えて一体となつて何かを生み出せる可能性を感じています。一消費者ではありませんが、ただ食べるだけでなく、鹿屋の素晴らしい食の魅力を守り、伝えていくために自分にできることは何か、これからも模索し続けていきたいです。

市長 管置きとして、そのまま食べられる落花生が出てきたことがあります。少しの工夫ですが、とても印象に残つていて、そういった取り組みは鹿屋を印象付ける一つのきっかけになるかもしれませんね。

和田さん 例えれば、弊社は落花生やさつまいもの生産を行つていて、その収穫体験を行つたり、酒造メーカーで焼酎蔵の見学をして、夜は収穫したものを飲食店で実際に提供いただき、焼酎と合わせて食べていただくなど、こうした体験を一事業者だけでなく、他の事業者を巻き込んだ形で行うことが必要だと感じています。また、飲食店に入ればお通しで焼酎や塩茹で落花生が出てくるくらい普及していけば、県外の人から見ても鹿屋といえばこれというようなインパクトを与えることができるのでないでしょうか。

す。鹿屋の広大な土地や作物を生かして、誰もが本物の生産現場を体験できるような場所があれば、もっと多くの人が鹿屋に魅了されると思います。



隈崎さん 情報が広がりやすい時代だからこそ、市民一人ひとりが自分のまちのおいしいものを発信することも大事だと思っていて、それがシビックプライドの醸成にも繋がっていくと思います。以前外にお住まいの方々に送つたことあります。反響をいただき、同じものを送つてくれないかとキタダサルツガに問い合わせもありました。小さな力かもしれません、同じようなことをみんなが取り組めば、大きな力になると思っていました。鹿屋の魅力を発信する上では、人との繋がりが大きな原動力になるのではないか。

和田さん 例えれば、弊社は落花生やさつまいもの生産を行つていて、その収穫体験を行つたり、酒造メーカーで焼酎蔵の見学をして、夜は収穫したものを飲食店で実際に提供いただき、焼酎と合わせて食べていただくなど、こうした体験を一事業者だけでなく、他の事業者を巻き込んだ形で行うことが必要だと感じています。また、飲食店に入ればお通しで焼酎や塩茹で落花生が出てくるくらい普及していけば、県外の人から見ても鹿屋といえばこれというようなインパクトを与えることができるのでないでしょうか。

市長 管置きとして、そのまま食べられる落花生が出てきたことがあります。少しの工夫ですが、とても印象に残つていて、そういった取り組みは鹿屋を印象付ける一つのきっかけになるかもしれませんね。

和田さん 広報誌で毎月、誰かのおすすめのお土産ボックスを紹介